六樹園飯盛著

近江縣物語

巻ノ一

へ13
2893
1

へ13
2893
1-5
門へ13
2893
1
9-7-3
昭和九年
六月三日
購求

近江縣物語序

ひとゝせ近江國よりぬ
ぶらり〳〵と山里なるに
とひらる人すくなうなり
やうよりゝ〳〵ぐ〳〵
のちゝ也例なるべ
いりきてうちかさら
ゝさかりのゝさ人
いるべしもあらねど
菊のあらびうちゝ

豫州圖書

くりたてくいはとうちずーたるが何となく
ちづうーげなしだ翁のいろりよりて興ある
物語をきゝるめれ也ーのくまはせよとい
だきなどてのやーしー先くちて侍色ばかりぶもも
みかつ中神で待りそのの中よむうーー此国乃
あがさにおちーけるく人者ちうげうう出のと
しーるるかくさてちう紀はまぎ伝のうり
色紀さてうにて我ーはくて待りしこの
あうやけてのちハ明くちーをぶよ等ちる
人も侍らぬさ翁のそのちさいをちりく

侍りといふうちきくうりいりすうゆうーさ
をひくさーしりてぞくのせだ翁すくうる
くちひぐらうーてかのの雪井沈乃菩提僧
ーまありあーりーー義どものまねびせんも
町さちいーーをこぐ母ーーれどはとぎは
さうひくくちかるーげてのらんもふすう
にはるめ也だといひつ柳ちゆるをうい新
うちをうくくとうちをひてでもくぬ
つすー町出ーる町也聲に毒ちちぶれがち
あるる古代なるか物ううさひぐりふーく

こりとちらあるこ
紙ちらでだこ
ぶ伝なこ
物語きぐり
葉とんも物く
ちついにこ
おほうなんう

六樹園

近江縣物語目録

第一　ふなもり

此巻ハ義京の季光が書初洲よりてるを設けるか
ちなみにそうなり成りしバ葬送ありに元禄の頃
ほりうがちるる時甚子ぶりうを諸人き金を食
をかやまし子成もひとり行しこと成

第二　せいがいし

此巻ハ義京保晩同齋光盛とありしおもり
うり橘安世が弟子百上橘九蔵ハいとがりけもバ
婚姻せんといつて同弟子なる常人しいと考ねこと
子母ぐの義計と思ひするにより極九亡命ちて
國ぶりかんとするとこと

第三　すのまた川

此老ハ梅丸すのまた川より流るゝ。盜人なりとて、人
〻取かこみ、うたれ、こゝろ悪び、ぬるゝ。後孫の為
者感ゝて、引つまて、屋敷をつくりたるとぞ

第四　草まくら

此老ハ橋安世が家、盜賊入事、粮藉よ乏び姫菌生
とゝぶ、ひゆ、こゝろ、ぬ、後孫のたつ、梅丸と名をあ、
都〻山〻せやゝる。梅丸逢帝、ぬ年人の家よ泊りて、
安世が家乃押をたゝけて、老人が乏ものをもとゞ免く
ものあす

第五　山のとね

此老ハ夜叉丸といゝぬすびと、菌生を妻よせんとして、
菌生がゝうりたおちる事。梅丸法師の人命をすく

第六　ひなぎ様ういふぐく

此老ハ常人、盜賊よ降参して、山ぶちとなり、盜賊大
を勢て、ゆりゝ孤屋乏及ひ風呂乃湯をゝ事。
ものあす

第七　いもかーう

此老ハ老人、金剛二郎と云盜人の兄弟。教父の家入ゝ。
物ぬすみとして、ゝ、さて、命なけうれて、金剛が、ゝ
逃出て、近江乏の安世が家よ泊りきて、孫おまゝ婦ゝ、ゝ乃
ぬ、ゝとあるゝとものあす

第八　伐表のうぢ

此老ハ盜賊うぢ丸一女ゝとやを川まてひさ

雪ふる時常人梅丸ともに菌生を異とし[illegible]
[illegible]物を求て[illegible]
を雪とり[illegible]夜盜人入て菌生をとれゆえ
[illegible]安世耳ひてとり[illegible]梅丸了[illegible]
[illegible]

第九 石山寺

一このまき安世梅丸とともに[illegible]
山寺に[illegible]
時梅丸[illegible]射て[illegible]保昌のもとに
[illegible]盜賊退治せんとて出陣[illegible]

第十 田村將軍

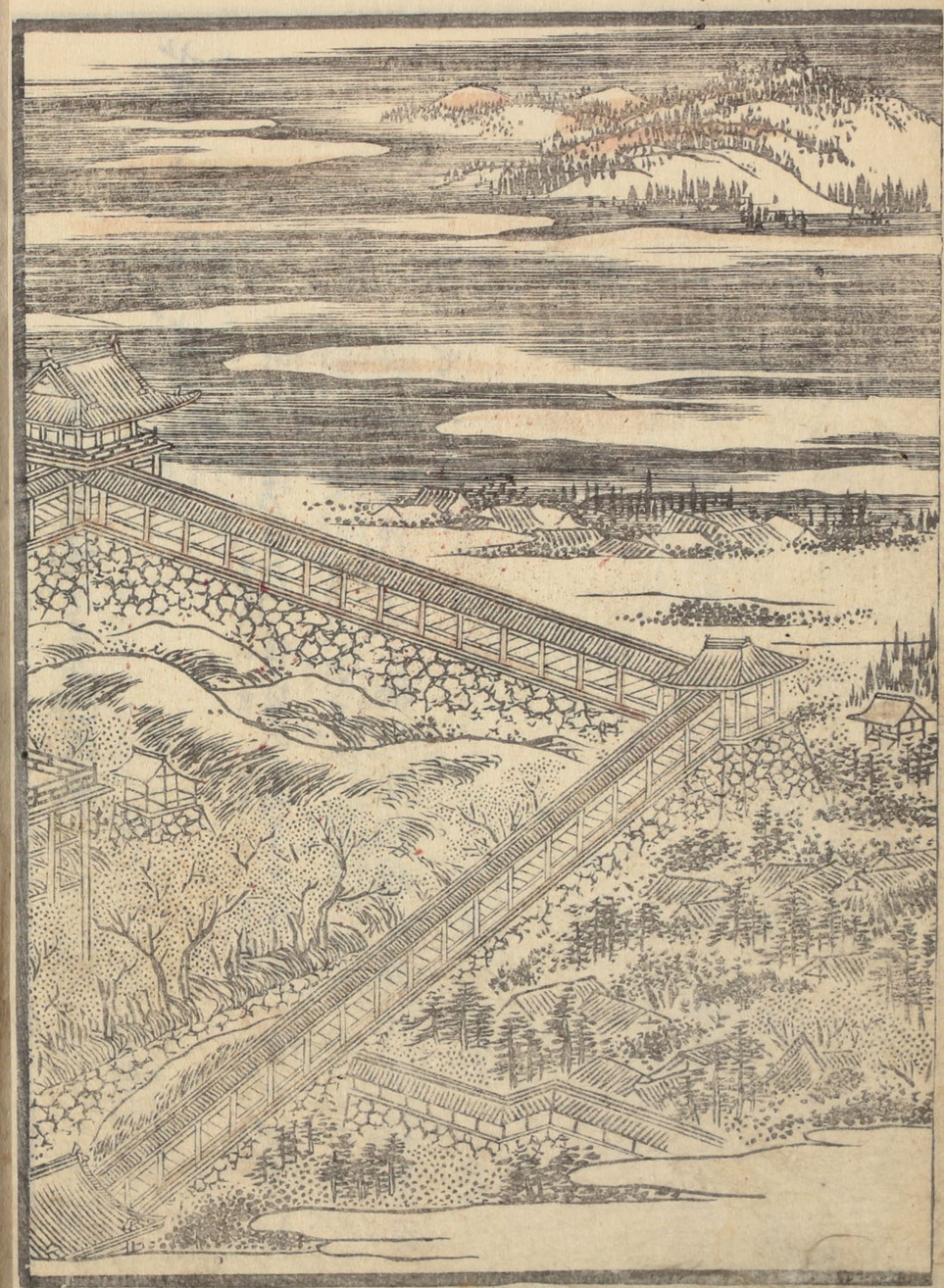
此巻ハ保昌逆賊[illegible]齋明と[illegible]梅丸智計の
事[illegible]梅丸常人が[illegible]田雪と[illegible]安世が重代

の貨とせる[illegible]

第十一 うどんげ

此巻ハ後[illegible]伴善の圖[illegible]待垂が陣に向ひ[illegible]
[illegible]常と[illegible]彩光乃[illegible]館[illegible]又子[illegible]對面の[illegible]西[illegible]
[illegible]師物[illegible]梅丸逆賊[illegible]
[illegible]

初瀬山の図



ふちわらのすえろう
藤原季光
我子の号
量を試
むる不

まこうの
春光ゆるくして
船岡の霞り
けり時に食
来りて
一衣張の
れとりゆん
とする所へ
旅人来あひ
て乞食
をあや法
ようがり
うるあと
はまの不

近江縣物語卷之一

○ふるもとの
今ハ昔村上の御時義孝の季光といふ人有り白河殿
ほとりに影ぬけたりて住り兄い源の満仲おそんなつ
かへて仲光とぞいひける此季光弓馬乃道よりしこく智
勇兼備しこそハ兄仲光ゆゑ乃ことなりけるを熱ひ思ひるゞ素なりきなとの思ひたりて
思ひて初瀬乃御ゆきでゝ祈願乃文御
燈をとたてまつりて法華経乃右の方なる局よ入る絶
歌誦経して暁乃ころ志ぎしまどろみぬしおりしかど
あるり由ゆきまでゝやきつるれば駿馬くゝなげ

たるたゞふる法師の幼き兒をうき抱き立おりて
此みどりゝ孫よあり此れを育てん事おさるべし
養ひたんことハ安うなんやすのまゝ妻はこのつゞ
れで相問まんとするほど雲霧のたゝやうに見え
ぬるりもひぬさて目さめて感涙とゞめ難し山をくだりて
京よ帰りつきぬ日数ふるほどに身たゞ朽ぬ成て行ふ
月ふるてやすらに子をうつ男子も有り然
季光乃子をうつ男子も有り然
ば親族の限りつゞひ
ゝて子をすゝめてよろこびいとしかりしほどに
のうちなれむ乃ごとく思ひいつゝ家で養ひ

ほどなく一年の日数もちて、若君誕生の日よりぬ。
季光せきんより、若君がもてあそび調度ハもとより
にて、筋文房の具なども、若君と申すもて、
いづれとも乳しらも守りあるに、若君ぬさりて、筋を
取て喜て放さず。季光うちもろく此、兒高琉の雑器
うめをうけず、筋をこれるハゆくすゑ我家乃、栄へ
見ひべきと兆なりとて、大きに悦ひて、即宴席を
設てうちのげ祝ひ、若君ぬ時、筋を放
さびひ人形なふりつ兆などハ、ふみぶにとそび、元ぬ
筋を取てで遊びるうまれつきさとかーとうなを
で、乳母ども、いとぎき物よりひとりてちゆーまを。

其年も若君愛地之とりしに、ひとりはぜ、
疱瘡を病くるる。新などにハさまでもなく
わて、おどろきて醫師請ぜて、薬をこひ、療治ろへ
ど、さはくまこ、ひろ枕どうひなして、五日ばり過し
く、午の時ばるなりぬ。父ハあまりに事に騒ぶに
こがさでおきれ、母ハなきめ、ひしくし抱
きたくうきくどもあるく家ぬもち、光ぬと抱く。
聲を愛てひとりよ、薬光ぬ、ぬ
らひく、国ちたきて、元るハ今ハうひなすむ
きめと守りそんいおうくよ、駒ふぐるつぎ枕で。

とく葬送の用意すべし。彼が衣服玩器の新しきを留めおくべからず。童子・婢・僕・鍋・釜・ふんどしかぎりハ悉皆焼捨てよとて、葬り物せよといへ。妻子よりはじめ、のべよおろんハあまりて俄なりあさてといへども夫顔うちうりていなん死るものと思ひて、ちぶりもかへよ法をとんハ鴉を断つちひを抱バとく出したてよといへ。あのをきなどのごとく用意して、その日乃暮るさま舟岡のあるよ舟ゆたるづめ葬けるよ世の中をなにたとへんと順あるんの讀うりしもかる晴るとていひく父母をちもり親族乃人ぐるかひと呼よろぼりめて顔よおほひるる袖り

ちるあり人ぐになしぼちるめても初瀬の観音乃美よさく入りしてなどてかくべく命みをるものを授させるひけるにう諸こて育んとかうべくとのるまひハ。ゆるるめ死るせるんとを告ひつる命れるを元も えず日をるるをきちるとて母ハうしんるく。泣まどひく絶入る事一度かり父も今ハ人南ぐ。ちりせんもこのるしぼるくをくして心や平れ山里ア。めれおもりてんなどいるのおまるまき人ぐるぐに いさんこうへられどやるん方なれ悲しちの日どるりやあるりぬるぐどよりるきんの間とハるる色 世れ此舟岡山といるハ亡人をとるる葬る所あり。

ちびちゝ物すゞにぬりにく屋ゝに人げきれなきを
を南て夜に入てハゆきゝするものとなゝ何とるき
高家乃雲ゝ人ゝこと所よハ仏ぞきゝるれぬり出ふら
き松の風ハ野寺乃鐘よひゝきをゝゝふ天物ちゝこゝ
なゝどいゝハ物もかゝるわりよゝそゝこゝろえゝく住いるべうが
れいとゝく物かゝちゝくゝゝゝ

脛高くかげる男の杖ついきるが色のすて
あるとえて殺鳥く頭うちかくもけく立あるほど
此兒ゑきりに法ゆしくれで又こるよ殺るて杖てく
ゑて塚宮を眺えくやがてまさしのべて兒を
抱きこりるにいよく頻り泣り紙ばゑつびゑ
ふとろつよかしてこつかるねはいうるするふりとあ
らめもせびまりをしばゆ旅人かの色を消よ
おひて立あがるにそうかるねちよにつて表ちちり
て色りまとうけくびきれば旅人はのるざ
出りぬぜ時ゑよ持る杖をけてれば火きく
ゑゆやめも見くびゑ旅人ねすびとごゑんなしとて

起あがりれとくくてちざうに見くびかさね兒の
すくく聲をきるべよねくひとりて旅人が獨ゆつう
みて投人とも旅人くゑ分をひくきてきもした
乞食はうりざにたるれぬ旅人呼ふとゆ
りゆして樹の根よすゑ置くさざりうりゑ
かくゑのとくくんとゆ乞食はちびる取よ鉢ゑ
有るをゑて兒がおくくゑをゆあてる樹ゑる方り
りゑくゑ旅人の呼ゆとおりふゑりをでくどうつ
ゆりに言くふりゑあげて新りもたゆ紙呼るよ
もゑゑくゆいざくに樹の庁枝を裂をりつ旅
人此青を開りりえりやゑくとちるびてたり

て色をのべて。毛食が腰のいつゝ右のるに。えりをとゝ
てゝいかりを投られば。ふるゝしぬて。彼塚穴の中へ
おち入ぬがごとゝ。ハかえゝ
多べゝもたゝび。旅人ハ
をふゝろよりいれ。色脊よ負て。大蛇よ云るハ。
ちゝゝつぎゝるゝつぎなるゝ。ゝひ事ちんゝれ。
かのゝゝよまゝべきゝハ。無慙のぬすびゝやつゝとあ
ぢりゝつゝして。歸ゝ兒の脊うちたゝきはゝ
がごぜゝゝといひゝてのゝにあゆゝてそ色ゆき
けゝ毛食ハ塚穴よ投いれられて。榎の角にて。擦を
おきゝたゝゝ。ゝ絶入られがやゝゝ人ゝぢちつきて。

穴をとひ出ゝ見ゝに。有ゝ色もなゝ兒も旅人も。
いげちいよゝんゝ。ゝんゝびゝちゝにてもかやつ。腰力をハいそ
拔ぶりゝんゝ。ゝたゝんよハ。まゝゝよゝそゝられゝハいの
なゝれハ。ゝのゝき事。我者のゝゝかゝゝたゝよゝし。
世よハゝをゝゝき者ゝをゝ。ゝりゝれゝと言をゝひ
ゝゝ。榎ゝゝゝる物りをゝゝゝゝゝさゝりゝ
ゝゝ。竹にゝ。ゝゝゝゝ。ゝ。ゝ。
數人形なゝ。榎の底よのこりゝるゝをゝて。錢よ
ゝゝべき物もゝゝれハゝゝゝて。ゝゝゝとゝ
ゝ。擦をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ事。ゝ
ゝび兒がゝのゝだの二つのゝりゝるを。ゝ右のゝ

持て、おのがすまうをちらしてゆき
くるそも此旅人いかなる者ぞあやしき所なる来
あひて、兜をさすけるよう又此兜がゆゝしすぐれ
たるあひらもぬゝんおもへさもちくちくきゆゑ
ちぐりちゝんとあるたのどうにすぎくの巻をひらきて
に見ぐちりまへうし

○せいづいも

さても其後花山院の御代よわりて藤原の保輔
といふ者ありけり左京大夫致忠の四男にて保昌あ
そんの弟なりけるを又右兵衛尉齋明といふ者あり是ハ
保昌ひがしの兄嫡男なるゆゑ両人ちうう

つようきのものなりけるに様ざまある事をほこいはれなして
人を殺し財を奪ふ事をこのみ常ゝ是ハ保昌
ひがしの兄天禄の初ゆゑ公家へ奏聞を経て両人とも
勘当ありて追やらるゝ事ありけり両人かゝる
あらせて盗賊の大将と成て数多の賊をもちこゞ
都鄙をいたびて白昼おもをかしく入て人の物を奪
ひ取て後くハ勢つきて五六百騎引つれ甲冑を着弓
矢鉾なゞ携へてあゆみつゝ武将の
追討使蒙りて打ほうくに出たちまちくに吳ゝ
ハの職名国くにおしいりて官
物をあしとり民家ハ美女を奪ひ又ハ寺社を焼

ちゝひなどもて粮藉りつゝ討なく振廻されバ弓矢あらゞ
官兵をはらハし是と責めくべども たゞ〳〵あきるゆく
ゆゑ賊徒の為よ兵器を奪れ あるゝぶるゝよ旅て
逃げる者のゝゑ多りけるさ保輔ぶあぶ名を待ぶれと
ぶびてゝ法の人〳〵怖おそれ一日保輔ぬまて
人らと集り酒宴もていひ保ハ今ハゝゝ安し味方
かゝ大軍に成ぬれバ齋明と調じあたゝ不日よ都よ奏
りゝん但我軍中兵粮多うゝび没等兵をこ富まし
良策ありやといへば調伏丸といふ者進し出るゝ
ひるハこゝかゝこきあ従でゝそゆゝ古語よ三軍
いまゞ動ゞれど糧草まゞ行とやてゝゝハ餉を

あゝけの事第一の軍謀にて我ともゞゝそも盗賊
乃名をとり函殘をゝ威をゞやうゝ孤姑息の愛
婦人のにゐゞ顧やべきやゝゝし調伏丸が有知ハ軍
勢に至ゝゝゝ豪民の家に打入り財寶牛馬ある
限り奪ひとりゝんゝハ糧よ変換し作すゝくや
といへば妻妾衰九といるゝいゝく道のゆくてに蔭ゝる
やつゞゝが家の物らんとハかりとうの覺悟ありて某
ゞ家ハ逃まゞゝ女ゞゝ老少をいたゞきゝて僕ゝ
なし陣中につゞゞ足高ゝ身のまゝを
出しゝ者よハ逃しつゝハすべく解ゝゝせゝたゞ親ゝよ
離ゝ別れゝ者ども財を惜まゞ持来りてゝゝ

こうして係りいたんずいたんにハ陣中の人々居なが
ら過ぐるの財をえいもの〻ぐいやしいくを袴ぶしをを
あつて。なをれいしくもやさしいつるか。出討我山な
かなひうり。昨日までハ。ほうきき女ぶ〻をのゝ奪ひ
て。各々のうちにかくし。園の伽としなさせいれど。今日
ゆうりハ。先ず美悪のきこゝひかくいけどりて。軍中に
繋ぎしおくべしとして。其人音三軍に觸ふせ。身價は
隨ひて生捕の賞あるべしとゆれば。諸勢
こぞりて。たやすくとらかゝ女ぶらの。二十人三十人
めらゝハ。干潟の貝を拾ふゝうりやそうりおん。繋ぎ
置く。渡らの賞ふ。ぶんとていさみ。ゆちびゆり。

其頃禅ぶれを。伊勢國鈴鹿山より。竜りのゆるゆ。移近
國を悩まし。財寶を集むべしとして。職ゆるをつうち
て。思ふにつゆしゆ見ば。伊勢。尾張。美濃。近江の百姓
等。おそれまどひ。男ハ田くをを止め。女ハ織ゆ
業をすゝひすゝすゝを閉てを守りをりけれ。
をを法近江國神崎郡。神崎の里より。橋安世といふる
人あり。祖父ハ出國のかみをゆりけるゆ。あり
守法うくをやりてゆく田舎より。こうりて。世〻醫師を
やしていとゆめり。蘭生しなゆ。むすめ一人
ゆちゆり。顔うつくしく。姿たをやうにて。絲竹乃
道ハちゆり。歌の名さくりうゆらゆ。

うりられば父母にさそひ物をぶらひてひつてこやーなひ
きて安世が甥よ常人といふ者あり父母もなすくく
乳母が家よりのりるを憎よりて引れて出亡
けり常人うまれつきんひぐ〳〵まぐ〳〵ちきのこゝろ〳〵び
芸能の方も無骨なりられば安世心のうちよりゆく京
いうぐあ〳〵んとたの〳〵なりひめうりう安世博識な
ほうくよ兵術みも達したりるとバ人のよ
ども弟子ゝ成て学問するも有又剣術弓馬の左
なすゞ学ぶ者も多りうり此数あるの中よ坂
上の梅丸といふ者ありけり年八ちゝ汁ふて面きく
姿うやびうよ学ざえの方も人よりちまさりて志もる

ちうけるゝ誰くれ所の物知人
こそ我業を継べき物なれし思ひられば経文の道く
ゝるるは更なり歴史百家の書よ至るまで發明者
説ども〳〵〳〵く傳へ〳〵るるまでうり〳〵ち
若者なしバ一を聞て十をしちうり知りて今八九右なる者
生ゝ〳〵なりもる学問のひま〳〵にふらひき太刀うちの
つざとも習ひていさゝうをうびくをげ〳〵学びる梅丸が
又八学問よりられ田楽の上るに坂上の梅丸し
りしー者あり梅丸ぶをさるれ八おのゞ業やしんで田楽
乃つざを〳〵〳〵〳〵ゝ梅丸がうり〳〵学文の糟
丸病〳〵ゝ方うせぬすうの田畑も持りれども

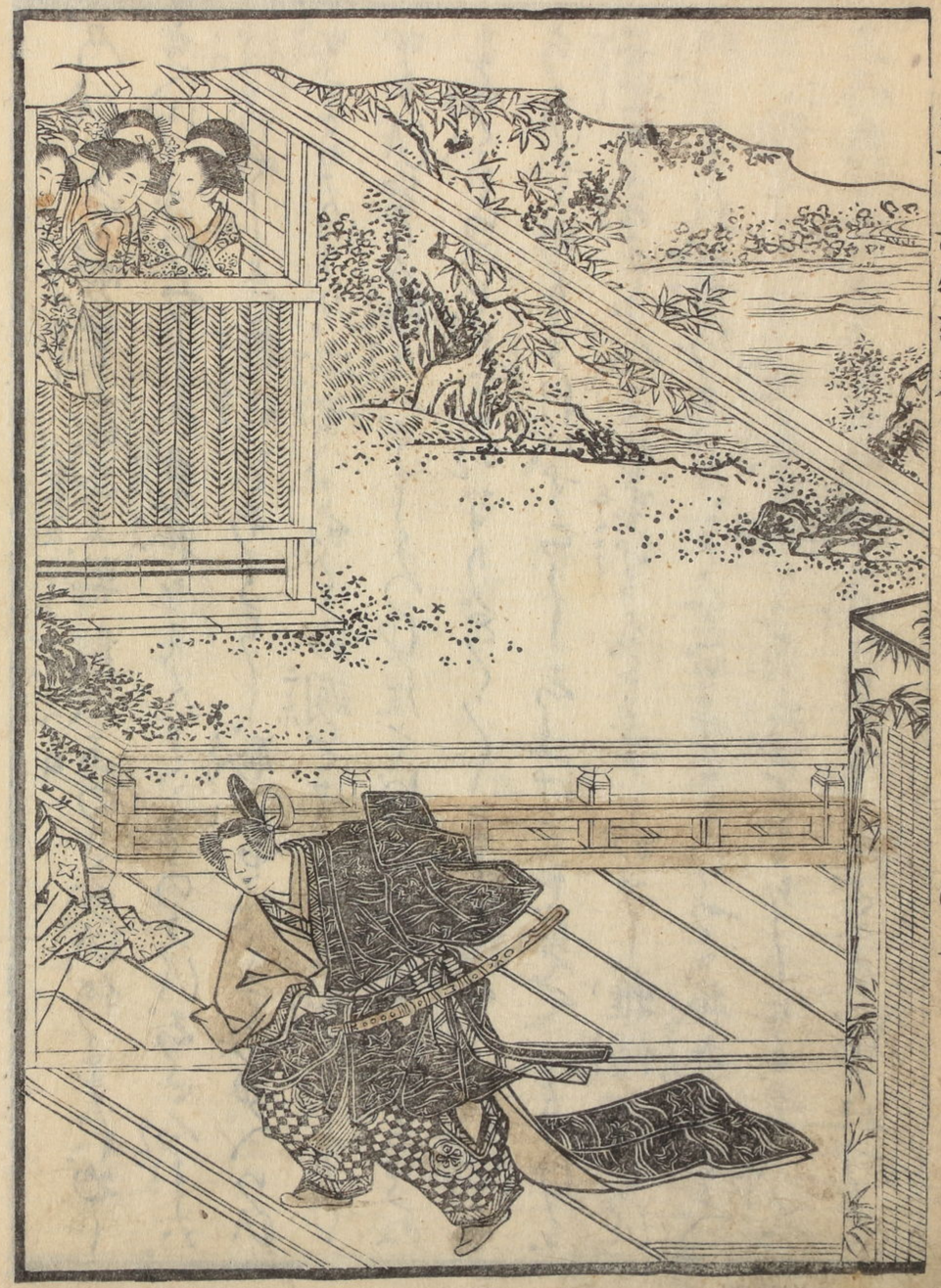
けるに、田作るべきちからもなく、ぜんこうをかけよろこんでいる
安世このりく、ふあつうひておのれが方よりもむかへ
なのめく、ゝづき、まひてうさのごとく文武の道をも
ならせをろう。安世醫師なれども家富く田畑多く
たくさん有れば、第をば見たるもの、みぎそくそで
世をゝくりける。常人おのが愚かなるさまで梅丸がうみざま
のすくれゆくを、ねたましひるゝ。後言
あるとき、ある日、安世妻をなすらく、
語りるは、物あるゝ人は、性強くむざくあれば物の用
ゝ立べきよりは、梅丸は才智あまり、藝能もすぐ
れたるとだうをもすめよめをせて、婿よせをもとう

ばかりにもとど彼田楽のゝにてあるとば人よりおもしろいと
きん事ふぐるうちゝとい、で妻うちきくうりづく
もの程てゝりさらそんづきてゆへだとひらうき家
乃子なりとも愚なるものを何よりちゆうん年のほども
娘といふあるをもゝゆへをかしを婿としなして家をとと
譲りのゝうしといらしまもしばそのころ
ばかりゝ娘ゝも語りのくゝ迎きほどよりて日とりて
梅丸ゝもかくらしべしなどゝ夫婦ひそやうかくひめ
ゝとるゝ常人屏風のうちよりとゝふとい事を
吟つけんよりひるゝは梅丸こそ我ゝらいうゝ
うゝれなれいでさるべきことぞもまくゝ彼を失たぐや

藤原保輔
強盜となり
民間の男女を
奏ひろり
同郡に表ホ
なのしみを
なすホ

とぞおりひつきける。長月の末つかた庭の梢をもみぢ
初霜をそ[illegible]ぬるがごとく綿をもてはるがごとく安世興ありて
なんぢ[illegible]を請ぜて宴席をもうけ文つくりそ
るくさみける。中にも菊のあるをバ愛いれて探韻
とうせて。おのゝ〳〵ほこりす。梅丸常人も若よりも席
にをりるが。梅丸が作りて詩とたかゝぎなりて。人〳〵
ほめのゝしる。常人ハ例乃にあり。一句とゞたうちもひ
かうとうそたてをりてたうてでゆうる。酒たけなを
すなび人〳〵醉くいたりて。やゝこだりがつきほひ
常人すゝ出ていひるハ梅丸こそハ其歌あてをすれバ
かうもむろそたぐよるもひべきなりびつくゝる田楽

乃ひとて所望ありて品玉輪鼓八玉のさゞひ何よまれ物
をくばりみゝき見物なんとそぐのうひ[illegible]ふ
彼ぶりやしき種姓をあらそ[illegible]砂ゑんとてかゆくりひ
ものなりりり。安世ハとあくの調をきゝくず。ゆゝしく
おりひをり。梅丸ハさゝらむ[illegible]てゆくゝひたせび。ゆゝるぬ
まうゝどハそそよかなりゝ。ちゝ[illegible]ずゝ[illegible]
うひてありうれバずゝ[illegible]ちけてそ思ゑゝりけ。
安世やみて人〳〵の玉ものもゝそぐ〳〵雅俗をいそび
何よまれ無ゆるべきゝゝをゝやせよゝりつる梅丸醉をべ
き詞なくて南面入て。ま度をでゝりる常人
ゑつぼよ入〳〵くやつ何事をうすんさうをゝのぞれゆゞ



坂上樹丸師匠の安世がもとに青海波を献上す

たる姿して出きたるが、例のくせ者博士どほとを
ふちたるに、んてけるこそまことにめるほど
なるに、業屋にて、物の言ども、ひぐき吹きてたるよりも
ぐちりたる紅葉のかうに、梅丸のごとく、裝束し、
あちて、青海波とて、舞ひたるこの
世のもあはれに、桂殿迎初歳、桐機媚早年とう
ち舞ひたる事、清くすみけりていうとしもあろ
かりに入おやのほどに、なるまきるといづして、舞うあでし
さるに、ひとぐくたる組おして、感じあり、いうでぬく
迎て、練じ賀ひとりるよし、安世夫婦ハちたり、
ひのうとあるまちたどる限り、靜うちあげて、ほめぶハ

なし、舞はて、常の服ふさとぬぎびて、ぼりまるを、
貴人ら感ぜさて、あるべきそほめる、梅丸和ひてのこと
聞れて、安世声ちつげてあれ、是曾有の興なりとり、義能
といひ、姫君といひ迎のごとれいだりにけるとぐ
神ふ姫ありゆゆ、名ぶ迎ふまるせんうけひたあるんや、
いうふとりくむ、梅丸あまりふ、俳なるとふていくすごさ羽と
かずぬを頃つきてかとすりたる、貴人らいでやかこれは
はうとひふこと、梅丸ぬ、とく領承ちまとすしれば、梅丸
かちをあげて、やう、清ひ乃ぬめ、さくひとかとならず
りくい、鶯ひまぐき初をなく、鶯くいを、ふんらいを、ら女をさく
強そんと、ふとりて、かるべけなく、育ぐれてそ

てとなりぬいとでもしたまぐさといふくられば安世夫婦
鮮あるべきはずびて春を待て吉日をえらび婚姻の礼をと
るのべて組定まるおきてなれば かくばう聘礼のもて
しをこなせめくとりのくだ 柿丸 吉げ 歩 寮 ゆとこ家
より縁にくつてこたるえだぐられ 柿 ふ すも
て安世が妻おのおのをくこられるを 此一品は父母ていをの
命 乃時 より出 毎 おのれ 舅 て 御 りに
一品を 釣 うみなり こぶ ひ さ て ば
命 ぐ ん こ り は 寮 ゆ 永 を 弱 と か れ
と ち め ら ひ さ お の れ 寮 窮 な る ゆ を き を
さ ま み が ご や く る も で 生 ま ご き 柿 も ひ ら ず 此

一品は亡父がおくさまあていすぐ封をぶた解いつね物なぐ分
よりては大切の寶にくらべて此一品聘物乃ものは
奉るありとてぶやくもくゆ迎りしだ安世をようちちげ
て此品いうる物とはもくねども 嘗 生 の聘物とした 辺の
卵よりてはこよすがき 贅 にてあしだ むをが生涯乃
守りともなすべしとて とりをさちて くよりひるはかる
ちこびき事文も有べうび 各 ひいちちづて
物より 柿 ちびの 酒 を 色 てこべとてこちくよ 採 壓 ち
けて 花 もすぐ 酒 の 赤 び 朗 泳 ちひうしてくく 興
おあり 常 人 はおりつとたびひて 祖 ちんしたひつ
中くにかれがさいちひよ 不興 りぬるよとすぐ 毎 くおぼへく

物そぶにいちばめ一つよ女ぞらちりべなどをのり呵うて
おのゞ曲目よ入てぞ面しけるさるにても梅丸がいうぞらきろ
見んせてんと霧もやうぞさるゝとおひちぞしるる君人めて
おろろをおろろしうろろれ安世が家すとうり肉外のさうひ
嚴にうく娘菌生がすめる所やしば米子など
りふ者にも出あひうる事ぞにるしさ仁ぞ女ぞらごりつさ
つく物語するにも梅丸が姿すぞれて学ぶざんの孔にもかし
ろれとをすぞりくにとうしゆんしば菌生もるん
をいうぞんをやのんあのりるゞとひ薬の物の者す
にどろされてめのにつふ一人つして何事なんと庭づさ
ひあゆゝゆてかいまゝ垣間見紅葉のこのまさうゝ花

ほうげにそびて光るゆうれたのころ光り羅く
をるさるぬみるりのなくおぼくゝぞるさひきこちちるめう
れゝぞもつるまぞんをりて部屋よ出りて思へるはあるは
何人みち一定伶人のまゝおそんかちのやんぞるく
えゝゝゝふはにりりの人まふおそ毛ぞおちんしゝうまれうん
りふるる人をうちろを流ぞ出て世をるをさばらるのあろ
ぞをやなぞちまぞくとおりひゝぞれつようりてゆるる
に出ぞ一有て女ぞゝゝぞるめき来くゝ御前ゝをゝ出ぞ
ぬふぞりるにこうひ梅丸のあり乃青海波義あるぞ世ふ
すんんをのにてゆひ一徳などちるるをゝと弟よちひ
ばりふかゝしくおぼくゝ物化のみよちゝくい

父ぶのくに君ぐちなどハ物の数ならぬ身なれども
きくと聞くさてハとよりひの舞人かきくゐ
しややつ橘丸のぬ
なのもとくどくど稲つもとおもしばらくて何ゆゑ
三条ゝいへれが出業くあるゐ喧何ごとのまゝといひ
ちく蘭生にむひて先ゝ聞せまゐすぐきこの
父君のゆるさせのくことよひ梅丸の君をにもむこがねとなく
おきてさせのひまるでうちくに聞へまゐせよと毎君の
仰せくいつゝ女どもちたち記ておまへとていと
きはさいちひおちしれあるいでくとにいひて
こよのくちつぐ蘭生もつかりくうしてハ

何とういをかんたちはおほひてうちあくかるをさしゐ
ゐる女どもおーくうりておまへみもまくまいりとおほ
すんちやはうれのほどにうちけりてんをまりるなど
ちやはあひちく秘かけぬれば格まあるうてゐるく
あ煙て臥所よ入て我いねるさてのしうたりて毎
芝生が部屋よ来りて おうくのうしを語りきうせ梅丸が
贈りうる聘物を出して終身をさめ置て大事にせよと
でいひをへうる蘭生此袋物がうけ元ゝ日ちあくゝ人
おりる錦のさいでうり出て繕ゝけ袋物をかへ入て級かく
ひきゆひてで秘め置るる扱まくねぢけ人の帯人へ
ちまぐ思ひぐていで梅丸ーぬしぎぬきせ人ゝ通

けれども、一年ばかりさきの老人、蘭生をよんでうけぬるゆゑ、むすこつけ女びとりめしよせて、艶書を、梅の枝につけて、おくりつかはす。蘭生、もつて、おそれきこえておさまりぬ。事にのりいてやゞて、艶書をそのまゝ返し、つゝそへ、そして、梅のもとにぬぎすてやりけゝる。

なほう、垣をゝ、ものいつて、梅ゞのなぞらへ、ものいひきわん。うたてやとて、書うる。常人こちやきんうも、此ものゝうたさぶらんやと、おうるうりさハ我どいふまゝそして、甚後ふえゝいひもせぬりゐる。此はきとありひはたゝらしく、すべきやうゝそあしくて、又ものむくつけ、女めゝひゝ、蘭生が国ゝ秘めある。梅丸が聘物とて、おくり

たる袋物ぬすみ、これよりこの此女おそきりのあて、やゝこそうけもて、蘭生が湯ひきをる。ひるをうがひぐ、かの一品をぬすみもてゆきとらるゝ。いれひそうよ常人よりつゝうる常人ゝらびて、中をぶにひゝまえぞ、紙の猪びらを、紙ゝうもてつゝ、ひきゆひゝく、又の日、梅丸がとゝに行てをけるハ、近辺近ゝよ、蘭生と、婚姻ふふあゝつけゝらゝうもびます。となゝ、ゝえゝ、但ふゝくもき事のいを、告ゝあゝ、塚ゆつびハゝてゝ、ごゝのもゝ、みを、外ゝ道理なれば、間ゝくひそうに、苦ゆゝゝ、そのもさいゝて、伯父なる人、此辺と、婚と、定うてゝを、蘭生いゝなる、和睦ようもゝいざゝうゝ、みふゝくゝゝて、夫婦のゝ

らひハ親さちのれんみもはうすべ犯とゝハづれゝも語りまハで
さる田楽の家乃妻としなりしなつしとゝ にのまりに仏なきれも
くゝひりとそたとゝひ父母のせりてのゝまゝとも我ハ梅丸が
妻とハなゝゝじそて昼夜なゝれゝ志づてをゆひゝゝ乃
ほゝじゝ志のくを呼ませてゝハ此一品ハ梅丸が方ゝゝ志
とゝて贈りゝ物みゝくゝんゝもゝてくおばゝゝゝ
やりたくゝゝなりゝゝゝゝゝゝ出
渡ゝてゝゝ面ゝゝゝらくゝすゝゝてゝゝども事ゝゝゝゝゝゝ
菌生がゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
手にゝゝて見ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとりにて男ひるハ菌生が吾をとるハ種根のいや
きたをきくるなくべし師に逆をさ吾が恥
のこすこ菌生ざ入いとまうんざうとてらく
日をもとしなる婚姻の期ちづきぬべしいにせどよか
らんとさ海ぐちひめぐしつ四五日をもとるがらよ
かくに吾は所よりてハこのさ蒙むづかりぬべし
海ぐ出をもちはくこのやとも傾べくとふ定りて
着ぐ乃衣眠をし色よつく返しおこせし袋物勝手
さし夜よかれてまぐひ出より文の日接丸ぐわるぐ
事をくいひさつぎられたもさるとうんとハ安世
心はうぐ所くさぐしとをくとを新をぐにとをとを

聞ておどろかてこいるとうんと夫婦ハたぐわきしな
あきれなり菌生ハずろよむねぐりて衣ひきぐぐき
て臥をり女ぐろハりまうう神よさをくやろすひ
けんぐ夫の陰陽師ぐこの驗者むくてんをぐひし
めをくくくく物よわりてさつぐ國乃堺まで行る男
ども塚きてろる出ゆくくもれをびとをくをいよくん
よりてせんくさし常人ひとりぐちほくあてをとと
ぐもとをとにのりてたる新つきをぐりのきる岩せ
乳母をちづけてとく菌生ぐろる株丸をろこぐさり
しやるぐ問きけぐさる事もをびといよちてハかと
んをとるくつひくかるかくあるんに一生をおてんハ夫夫の

ふつさかりてびとうひて去りたるや。さるけらひなど見一人やわるしいへど。若人侍しとかりひて。蒼ていひいるを。さしうちする事ハ見とめいとねど。ゆくゆく腰刀うちたたく。出ゝる車やう。食よ魚やう。かぐ。獨ごとにやーてうひーを。何ごとぞと。答ひへど。ひのごとにて。絵ゆえぶりきその外よ。ゆきうりうるとともゆとびと。倒ろつてごとを。裏もあおめうとびりの。安世うちうかづまて。さるほくも。此ゆえに出てあく。べきあうびとく。猶後者あどくにいひつけて。おまねく一形くさがーりとあうせる。薗生ハ。其日うり抱よかうて。別れるぶの。絶るやうひて。歳て。走もあどくび。安世夫婦ゆく見うり。初のどうにとかくいうさうり養ひて。日と過しるとで

○すのまさり

ゆくて。猶九を安世が家を出ゝ。考の方に三月あまり出びをるほどその中ゝも。言て言ふ。あぬいつまてかくてあるべきなるべく。今ハ。ひりもうるくとと思ひめづして。父の言ゝかり。国楽法師の。まゐ国小するあれどかくかりて。母乃をきゐり。城とうゝもどやとひて。母をこめてうゝ城出ゝく。遠ゝをさーてでいそぐる。方すかうかりひるハ。年ぢ身ふたうるばりいつくみのる。昨ふそもき。年うかうゆく。あかさ。外と。あぬるとおのが。申くすあ。さとたうむあれ。昨なる人乃さそはうたうせううめかーこさるなりあれいつの世ふう大男よむうひをうべきなどるりひづけてるさす

ら者るほかりうの〻まゝ足かゝりつゝ出ゆきさるこの時春夏隆
ほ〻者も簑笠うちうづれ〻ゆく〻けぶ〻きとしく〻ぐさうこ
りうみ出る面影ふ谷川乃流れ音たゝ〻ぬえたゝむらの
紅葉ひまもなく〻紅梅なびく〻蘆かゝすゞのぬれそぼち
てらひちぶ指ぶひのゆりさげふ見ゆるとあもしなりからう
してすのまゝ〻いふ川べみつきるに洲崎の面ふうさま
うて濁りをとゞめうとしたゞぜんすべる〻出繰ひる
るふこなさ者るあや〻の歌に人あやまさ者まれて絃なら
んとうゝひるふ濁りをとゞめられ〻橋人へどる。みな
ゝふゝぶ波りをうゝこよひうちよ水ら影ぬゞ〻きら
であそ八と〻濁るべりれば〻ふふ者ふ爰ふ者りぬへと人のいふふ

つきてゝ〻ゝとして彼家ふ入て足あゝひく〻一間ふ入てゝ入て
旅人ら二十人あゆり所〻にあゞりぬうり梅丸會尺ちてがゝる
謡りあるふはゝ〻ゝうりかゝどゞ〻ゝきて葉硯なゞ
とり出し道ゝゞう詠ふ詩者るゞ思ひ出ゝ〻学す
ゝうゝ者ゝゞうりる花道ゝてゝりる火うち袋を膝ゝう
あうに光ゝうし置りるをがゝふ碁ゝちゝ者る。猫人乃
有りれがはりゝ〻ゝうきて梅丸が火うち袋をよりあげて
眼を大〻ゝうて云るハこのひうち袋ハ遍ゝて我りゝつる
物なりゝゞりでそこのゝゝうに置るゞゝらひゝ〻ゝかゝうをゝきゝ
ゝ〻ゝいよ〻ゝあやゝゝめるけゝきて此ゝちにへ至つる物
れゝゝちてハゝやう濁てゞ濁りるゝゝしいゝに出ゝゞびかゝ抱き

梅丸すのまゝ
りゑ宿りて
旅人よねを
びとそろ
いひけち
きらく
とる所

見せんずといきまいて居ざけ高く成てり梅九うち驚き
それどいかゝをひく論じいへべきにあらずとおりひめぐゝして
面をやゝうげて云けるハさてハ此辺の物あそこまでひはゞと
おのれも又道にて求てゆくべきぞと心えてかゝて置て
なり内よ入直すひしハいろある物にくゆゝくバ銀一両
を紙につゝて入直つゝ付ねーびでもゝざんやとみゝみ
はらいよ梅九ふと絞ゝうゝ取出ゝうちひろげて
銀をり出く紙よりー巻てかゝぐるよ巻くは疑を蒙り
ゆくゆゝうんやゝもゆゝとび此銀とり納ちひてはいりを
とゝたるつゝんとりくゝだゝ紙とりふとゝあるよ納て猶うちあら
みゝく旅ゝもゝびバおのれさてゆくべきハぢゝあゝ

かーはよ盗人のゝびゝありて物奪ゝとゝきくおれもその同長
にゝそとりゝをゝバゝゝかーゝかぶ決ゝ面ぐゝすゝーゝそしバゝかゝゝ
おゝく鳴やゝぬ梅九ハゝゝゝゝの人乃おりゝん所もゝゝ
かーくて面おゝくなゝて猪ゝ向ひゝり走ゝ有てかの
男ゝゝびゝ暮ゝたんとて盤ーむゝひゝるよ石ゝしゝる筥乃
ふゝ取てゝゝゝけゝる中ゝゝ火ゝうち袋ゝゝとゝゝぶゝと
出ぬむゝひゝゝる男ゝく手に丸て是ハそこゝゝゝひゝゝる
物ゝゝひゝやゝといバ取ゝくひゝき見ゝよ中に銀ゝゝおのゝ
おぼゝある文古乃紙ーて包てあれバまゝゝかゝゝゝそハ
ちゝよ旅人をゝゝびてゝゝゝゝ

人をうがいて、ぬけ人をいひしれば、今ちうじうた役
もいとしがいるべきかぎりなく、不便なる事なりとおもひつかのをとこ
おかげく、梅丸が傷ありちいさき業てざれは男ひさぐてあるぬ
事成申かけてのひきおのが火ひち代袋のごく似てゆくはかし
ふーきかるこをとを中中てい今うーなひつゝ梅丸見つけ出て
少ゝ孫りいふはは返ーまあるもちるまてもうちでき雑言
申てゆとゞてそうくのべ申べき詞もなくいあをしたとくま
ゆるさせのえなんしおめくとうとをかうるなる人くいさや
人をちしてぬすびとこ悪名をつけてのもりーとあを
をくゆるべきかるべそのうにはかやつがはるまちゆがむ
ばりうちうりてきて意状カせてそうをのるくなどにぐは

いくを梅丸耳にもいれでうちあみてかの男に向ひてさて
をれがーを盗人くしおぼさしはるがひはをあひぬーや先く
らなこでくくて移りへされよ奉りる火うち袋返ーまくこと
うるとくくそ移りへどかくのるまひ事たはちうだちまるる時
てはちもあるべき道理しなりるへでひがとくはれるびい逃るふ。
移んびろにおほせるつこしなるくれるーくれさるふし
いくでかの男はうるこびておりとの所よ退きるを旅人どる梅丸
がかるくを見やりて膳こうるもるき男うれいひびひかりーや
れどかるこうよつきだろひいふりり家あるどくうきさり
ぎを学てがーらうたつ巣ドのりるが梅丸が穏便なる
詞ーこをさありれしばらどめてやく息をつきけか。

かくて年のほど十余なる人、京京の武士と聞きて、供人あまたつれるが、姫紙を少のべくとかきて、梅丸がまへ差りてさて〳〵感じ入るほど底ふかくおもひ入て、乃かだりの心をのどうに、そなたうたがずりつて乃直不疑が故事にもさくわとるまでくわばてくいるる人にくいづく〳〵物語ありて、旅宿をしるてうこうこうずい物語あるとて、梅丸がのれ近江國へ、相ひらちゆうとも親族もなくゆへ今より遠江國へ入りるのくうべゆへ〳〵かーことさーて、弟わりゆなりとしてさらばなしまにくくうるべなくたづねしうまそおのれくくとーけのまで、子こうまとのやくて世中たのくなく過ゆしたして行まし。

遠江國なる人もさまでもくたゆうなびいうまそしがーーうるまひまひて都にのぼりまそなんかのかひ物ー奉ーんとねんごろよりくだ梅丸ゆよりひるる人ーくたのしべきもたうくべ此人のかくあつくあーくだ。かるる人よりきそひて都あやのぼりなーと思ひてをつきていひるハのくまくがごくいづくるきくき一族とちくうねだゆゆーを蒙りるだ供つくまりてんとうようの武士大きにまこびさてハ我ほいよあるひてうれあくくそゆ此こうびハ恐びくたのつくの社よまくてんとて生まるにくいそこのもかのハ社よそ都にのぼりうべーとてかのが居る方に伴ひ行て、酒など

のまぜとひるく物語りて今はひさすゝよおのゝをそのゝ
おぼつかなきやゝにはゝるゝ世ゝなどいつゝたのゝくゝ
涙ほろくゝとこぼしぬ物のついでよ従者なるものよ問ひく
ものはいかなる方みちゝへだ嵯峨野よ家つくりて住まゝり
むゝしはいかりしき武士よおもゝれど今は世のまゝにいりもも
なつぞ者づゝかゝれ住まゝり世よは嵯峨の左衛門なし少ゝさ
てまろゝといふゝ梅花ゆひるはいづまもあれまゝくの人よは
おゝせゝじゝたのりくゝうしたゝ祈ゝてゝそれより此人を
ほとけとそうれ国ゝぞぐりる

近江県物語巻之一終

神田
通新発行所

通鑑第五所